

サブ添乗員のエジプト旅

桜井良（NPO 法人「社会総合研究所」理事）

はじめに

アラブ調査室に掲載される論文や記事を、時折、興味をもって読ませていただいている。しかし、私自身は、企業を定年退職するまで品質管理や製品評価を専門とし、アラブやイスラームとその文化については門外漢だ。したがって、これから書くことに、誤りや的外れがあるかもしれない。その場合はご容赦願いたい。

2019年12月15日から22日までの7泊8日の日程で、妻と双子の孫娘（当時、中学二年生）を連れてエジプトを旅する機会があった。そのときの小さなエピソードを書いてみたい。

エジプト旅行のきっかけ

エジプトは私にとって未知の国。古代エジプトの歴史もほとんど知らない。それなのに、なぜエジプトか？

私が会員となっている NPO 法人社会総合研究所が、2016年9月、塩尻和子氏（筑波大学名誉教授）に「イスラームを理解するために -相互理解と対話を目指して-」と題する講演をお願いしたことがある。講演準備は私が担当したが、あるとき、塩尻氏にこう言われた。「桜井さん、エジプトに一度は行ってらっしゃい。世界観が変わるわよ」。この言葉が、私の脳裏からずっと離れなかった。エジプトは、50年ほど前、塩尻氏が京都大学大学院を中退し、当時、カイロの日本大使館で仕事をされていたご主人と結婚するため、花嫁衣裳を携えて行った国。

私は古希を過ぎた。体がまだ元気なうちにエジプトへ行ってみたい。そんな気持ちが強くなった。2019年夏頃である。自分で旅程を計画することも考えたが、しかし、エジプト国内の交通事情もアラビア語も分からず、見知らぬ土地に家族を連れて行くことに不安がある。そこでツアーを利用することにした。結果的にこれが大正解だった。

旅程

カイロ行の航空会社はいくつかあるが、直行便はエジプト航空のみ。週一便、毎日曜に成田⇄カイロを飛ぶ。他はイスタンブールやドバイ経由。そして気候的にベストシーズンは12月～1月。また、エジプト南端にあるアブ・シンベルにも行き、そこからナイル川を船で下ってみたい。30歳代に読んだ Agatha Christie の「Death on the Nile」（ナイル川殺人事件）の舞台だ。そこで、孫娘には申し訳ないが中学校を1週間休ませ、

エジプト航空を使い、ナイル川クルーズも旅程に含むツアーに申し込んだ。

旅程は次の通り。

1日目	夜	成田空港→カイロ（14時間30分）
2日目	午前	ダハシュールの赤のピラミッドと屈折ピラミッドを見学 サッカラの階段ピラミッドを見学
	午後	ギザの3大ピラミッドとスフィンクスを見学
3日目	未明	エジプト国内機でカイロ→アスワンへ移動
	午前	アスワン・ハイダムと切りかけオベリスクを見学
	昼	バスでアブ・シンベルへ移動（3時間280Km）
	午後	アブ・シンベルのナセル湖畔を散策
	夜	アブ・シンベル神殿で開催される音と光のショーを鑑賞
4日目	未明	ナセル湖に昇る朝日を浴び、アブ・シンベル神殿を見学
	午前	バスでアスワンへ戻る（3時間280Km）
	午後	イシス神殿を見学 ファルーカ（帆掛け舟）クルージング体験 パピルス製造の工房見学
	夕方	クルーズ船に乗り、ナイル川下りの開始
	夜	船内でヌビアン・ショー
5日目	午前	コム・オンボ神殿を見学
	午後	エドフのホルス神殿を見学
	夕方	エスナの水門を通過
	夜	船内でガラベヤ・パーティ
6日目	午前	ルクソール西側の王家の谷とハトシェプスト女王葬祭殿見学
	午後	ルクソール東側のルクソール神殿とカルナック神殿を見学
	夜	船内でベリーダンス・ショー
7日目	早朝	エジプト国内機でルクソール→カイロへ移動
	午前	エジプト考古学博物館を見学
	午後	ホテルで休憩
	夜	カイロから成田空港へ帰国の途（12時間）

ツアー参加者は、私たち家族、そして若い女性の添乗員を含めて17名。エジプトでは50歳くらいの男性ガイドのアーデルさんが全旅程を同伴してくれた。

もっとも期待していた3泊4日のナイル川クルーズは、楽しかった。アスワンから乗船し、途中、コム・オンボ、エドフ、ルクソールに寄港しながら、古代エジプトの遺跡を見て回った。好天に恵まれて青空が広がるナイル川。甲板の先頭に椅子を並べ、気持ちよい風を受けながら、ワイン片手に両岸に展開するのどかな光景に見入った。川面に反射する光、田畑の緑、放牧された牛や羊、ナツメヤシの林、小舟を操って魚釣りに興ずる地元の子供たち、遠くに見える光り輝く砂丘。見飽きない。また、アラビア文字の書家が、ツアー客ひとりひとりの名前を、音（おん）をもとにしてパピルスに草書体で書いてくれた。そして、狭いエスナの水門を通過したときに垣間見た、船客と岸壁に居並ぶ商魂たくましい物売りとの騒々しいやり取りも面白い。



船内では、アラビア文字の書家が、パピルスに草書体で名前を書いてくれた。



ガイドのアーデルさん(中央)。

夜になるとパーティが始まり、みなでガラベヤを着て踊った。ガラベヤとは、エジプトの民族衣装で上から下までストーンとしたデザインの寛筒衣。裾や袖口がゆったりとして、しかもくびれがないので通気性がよく、エジプトでは日常着になっている。妻も孫娘もこれを着て小さな舞台に立ち、クルーズ船の他の乗客だったムスリムの若い女性やその子どもたちと一緒に輪になり、楽しく踊った。

さて、本稿では、何の遺跡を見て、どんな歴史を知ったのかは書かない。代わりに、旅先で出会ったエピソードを書く。

エピソード1：エジプト航空機のトイレ故障に憤慨する

エジプト航空のサービスの悪さについては、社会総合研究所のIさんから聞いていた。Iさんは東京外国語大学でアラビア語を学び、その後、カイロに留学して磨きをかけた。就職してからは中東やインドネシアなどのイスラーム圏で仕事をしてきた彼が言うのだから、間違いなからう。

案の定、そうだったが、落胆したわけではない。事前に承知していたから。その代わり、これから述べるトイレ問題に遭遇し、お陰で機内での退屈がいくぶんか紛れた。

成田空港からカイロまで14時間を越える長旅。私は飛行機に乗っている間、提供される食事はほとんど食べない、というか受け取らない。お腹が空かないからだ。そして、眼下に次々と流れる中央アジアの乾燥した山並みを眺めたり、機内をうろろうろし、ギャレー(CA: Cabin Attendantが食事の準備や休憩をするスペース)に行ってお暇そうにしているCAに話しかけてコーヒーをもらったり、無駄話をしたりした。トイレを使うとトイレット・ペーパーやタオルが切れてなかったりする。「しょうがない、エジプト航空だもんね」。そう一人合点し、それらの補充をCAに伝える。エジプト航空のCAは、全員とっていいほど男性である。

そのうち、あることに気付いた。私の席の前方に4室、後方に3室のトイレがある。

そのうち、前方と後方の各1室が「Occupied(使用中)」を示す赤ランプが点灯したままになっているのだ。10分、20分と経過しても赤ランプ。これはおかしい。私は機内後方にあるギャレーに行ってそのことを伝えた。すると何事もないように、「そのトイレは故障中だよ」と答えた。「へえ～!! 直さないまま平気で飛ぶんだ」と驚いた。席に戻ってぼんやりしていると、故障中のトイレの前に並んでいる乗客がいる。再び席を立ち、「このトイレは故障です。並んでも無駄ですよ」と教えた。乗客はお礼を言って他のトイレに向かった。そこで私は考えた。再度、ギャレーに行って先ほどのCAに、『「トイレは故障中』の貼り紙かアナウンスをしたらどうですか」と尋ねた。すると肩をすぼめ、「俺の仕事ではない。俺の知ったことではない」というような素振りを見せた。

私は、「なんという航空会社だ。サービスが悪いといってもこれはひどすぎる」と腹が立った。そうしている間にも、故障トイレの前で順番待ちをする乗客が現れる。トイレ近くの席の乗客は、トイレが故障していることを知っているはずだ。なぜそれを並んでいる人に教えないのだ!! CAも腹立たしいが、教えない乗客にも腹が立った。

私は席に戻り、バッグからノートを取り出して2枚引きちぎり、各1枚に大きな文字でこう書いた。「This toilet is out of order. このトイレは故障しています」。そして故障している2室のドア・ノブに貼り付けた。それを見ていたトイレ近くの乗客とCAは、苦笑いを浮かべた。唯一褒めてくれたのは、妻と孫娘だけだった。

この一部始終を見ていたツアー客は、私に「サブ添乗員」という渾名をつけた。

エピソード2：ガイドのアーデルさんにムスリムの日常生活を聞く

エジプトの全旅程に同伴したガイドのアーデルさんは、日本語が堪能。エジプト文明に詳しいだけでなく、優しい。日本にも何度か来たことがあり、奥様は日本人。

私は、エジプトの人口の約9割はムスリム、残りはコプト教徒ということは知っていた。アーデルさんがムスリムであることを確認したうえで、ガイドとしての仕事が一休みする夕食時など使って、日常生活について質問してみた。

私 日本の好きな食べ物はラーメンと聞きました。ラーメンにはチャーシューが添えられるけど、どうするの？

アーデル 隣の友人にあげるね。

私 でもスープの表面にはチャーシューの油が浮いているし、調味料の醤油には少量だけどアルコールが使われているよ。どうするの？

アーデル 入っていなかったことにして食べるね（笑顔でウィンクする）。

私 ムスリムは1日5回の礼拝をするけど、アーデルさんはガイドをしているときは礼拝していないように見えるけど。

アーデル 仕事のときは礼拝しないけど、夜の礼拝は5回分まとめてお祈りするね。

また、アーデルさんは大英博物館を「どろぼう博物館」と蔑称して憚らなかった。イギリスは、フランスに代わってエジプトを支配した1800年代から保護国とした時代

(1882年～1922年)にかけて、発掘されたミイラやロゼッタ・ストーンなどの至宝を本国に持ち帰ったからである。

1971年、私は23歳のときにロンドンへ仕事に行った折り、休日に大英博物館でロゼッタ・ストーンを見た。当時は、手で触ることができた。36年後の2007年に妻を連れて大英博物館に行ったときは、ガラスケースに入れられていた。

クルーズ船内でアーデルさんが、ツアー客に20分ほどイスラームの簡単な紹介をしたことがある。ツアー客はイスラームに関する知識をほとんどもっていないように感じた。そこで私は、彼の許可を取り、塩尻和子氏から聞いた付け刃の知識や東京ジャーミイ(渋谷区にあるモスク)を見学したときの様子を付け加えた。アーデルさんが、アズハル大学(イスラームのスナ派の神学校)も知っているかと聞いてきたので、「知っています。日本からも何人か学びに来て、アズハル大学を卒業したことを誇りにしているようですよ」と答えると、微笑んだ。山形県酒田市から夫婦で参加したツアー客は、「サブ添乗員はかなり勉強していますね」と感心して言った。

エピソード3：満面の笑み

2日目の朝、「赤のピラミッド」の長い階段を登った。ギザのピラミッドは超有名だが、ダハシュールの「赤のピラミッド」や「屈折ピラミッド」まで来る観光客はほとんどいない。辺りは閑散としていた。登りながら周囲を見渡すと、砂漠がどこまでも続き、遠くにぼつりぼつりと小さなピラミッドが見える。中腹にあるピラミッド内部に通じる洞穴まで辿り着くと、ひとりの痩せた初老の男性がいた。身なりや態度から、ガイドとは思えない。地元住民のようだ。誰かに頼まれたピラミッドの見張り？ 私たちが洞穴に入ろうとすると、「入ってはダメ」と身振り手振りで教えてくれる。近くにアーデルさんも添乗員もいなかったもので、それを確かめることもできない。しかし、「洞穴の入口数メートルなら入ってもいい。そこで写真を撮ってあげる」と、親切心丸出しの笑みを浮かべてジェスチャーで示す。ツアー客は、次々とスマホを老人に渡して記念写真を撮ってもらい、そして階段を下りて麓に向かった。私もその老人にスマホを渡し、家族の写真を撮ってもらい、お礼を言った。

私も麓に降りようとして階段に二三步、足を踏み出した瞬間、「アレ!? ひょっとすると??」。老人の顔を見上げた。彼の表情は、少し寂しげ、いやがっかりしたような…。そして思った。「そうか、彼は観光客に写真を撮ってあげて、そしてチップをもらうためにここにいるのだ」。私は財布から1USドル(約16EGP: Egypt Pound)を取り出し、渡した。チップの相場は3～5EGPなので、彼は満面の笑みを浮かべて私に感謝した。日本にはチップの習慣がないから、先ほどのツアー客は何も考えずに降りたのだった。

中腹から麓まで降りてから、さらに考えた。「入ってはダメ」と言っていたが、その老人にチップを渡せば、洞窟内部に入れたということか？ そうだったかもしれないと考えたが、再び長い階段を登る気力はなかった。



ダハシュールの赤いピラミッド。朝の逆光で撮影したので、背景のピラミッドは、ぼんやりとしか写っていない。

7日目の早朝、カイロに向かうためルクソール空港のロビーにいたときの出来事。私はトイレに入った。そこには清掃係の若い細身の青年がいて、私に気付くと軽く笑みながら目線で挨拶する。用を済まし、手を洗うために洗面台に行くと、その青年はさっと近寄り、手洗い用ソープの入ったボトル容器のノズルを押してサービスしてくれる。やたらに親切だ。チップが欲しいのだろうか？ しかし、ガイドブックには、空港でのチップは不要と書いてある。

その後、飛行機の出発が30分遅れるとのお知らせがモニターに表示された。私たちはホテルで用意した朝食を食べることにして、私は手を洗うために再びトイレに行った。すると先ほどの若い男性が、やはり洗面台にずっと近寄り、サービスしてくれる。彼は間違いなくチップが欲しいのだと確信した。そこで1 USドルを渡した。空港でチップを渡さなくてもいいのは、たぶん本当だろう。しかし、渡していけない理由などない。

飛行機に搭乗するためロビーからゲートに向かう途中、偶然、彼に出会った。彼は私に気付くと、満面の笑みを浮かべた。

チップの習慣はヨーロッパにもある。私は何度か仕事や観光でヨーロッパに旅し、必要に応じてチップを渡してきた。しかし、「赤のピラミッド」の老人のような、そしてルクソール空港のトイレの清掃人のような満面の笑みを返してもらったことがない。もらうのが当たり前という表情で受け取る。もし、渡すのを忘れると、あからさまに不満そうな顔をされることもある。

イスラームではお金を持っている人がそうでない人に施しをするのは、五行（信仰告白・礼拝・喜捨・断食・巡礼）のひとつ喜捨に当たる。チップは喜捨ではないが、満面の笑みを返されると、私も微笑みたくなる。

エピソード4：若いエジプト女性は宮澤賢治の研究者だった

3日目の未明、カイロからアスワン行きの国内機に乗った。60人ほどが乗れば満席の小型機。タラップから乗り組むのが、妙に昔懐かしい。機内に入り席に落ち着くと、30歳くらいの肌のやや黒い細身の女性が乗り込んできた。アフリカ系？ ベール（ヒジャ

ブ)を被っていないので、ムスリムではないかもしれない。彼女は小さなカートを引きながら私の席に近づき、カートを私の頭上にある収納棚に入れようとした。私はとっさに立ち上がり、「May I help you?」といいながら、その女性からカートを受け取り、棚に上げようとしたその瞬間、「少し重いので、気を付けてください」という流暢な日本語が聞こえた。「エッ? 俺はいま、日本語を聞いたよな?」。そう思い、辺りを見渡しても、声の主はその女性でしかありえない。

女性は私の隣のシートに座った。なぜ日本語を喋る? 強烈な好奇心が沸き起こった。アスワンまでの小1時間ほどの間、窓からは、東に昇る朝日、ナイル川の流れや砂丘、ところどころに点在する街の明かりが見える。そうした風景をちらりちらりと横目で眺めながら、私はその女性に矢継ぎ早の質問をした。女性の名は「アミーラ」。「王女さま」という意味らしい。アミーラさんは、十代のときに「宮澤賢治」の本を読んで興味を持った。それが高じてエジプトから北海道大学と筑波大学に留学し、計3年間、日本語を学び、宮澤賢治を研究した。現在はカイロ大学で日本語を教え、月に数回はアスワン大学にも出向いて日本語を教えているそうだ。

宮澤賢治といえば、私も妻も多少の知識があり、著作も読んでいます。花巻の賢治記念館、そして賢治が書きなぐった『雨ニモ負ケズ』の手帳を展示している盛岡の光原社を訪問したこともあった。賢治の存命中に出版された本は「注文の多い料理店」と「春と修羅」の2冊しかないが、それを世に送り出したのは光原社である。妻も、賢治が花巻農学校で行った授業を再現した「教師 宮澤賢治のしごと」(著者・畑山博)、賢治の人生に大きな影響を与えた友人・保阪嘉内との交流を描いた「宮澤賢治の青春」(著者・菅原千恵子)なども読んでいます。

さらに言えば、私の学生時代の同窓生で登山とカメラを趣味にしているH君が、「宮澤賢治の山旅」という本を20年前に上梓したことがあった。賢治の作品には、数多くの山が登場する。実在の山もあれば、架空の山もある。日本の山もあれば海外の山もある。架空の山については、たぶん、この山だろうと推測している研究者もいる。H君は、実在する山、たぶんこの山だろうと推測されたすべての日本の山に登り、その紀行を「宮澤賢治の山旅」にまとめた。

そうした事情から、アミーラさんと私と妻の3人の会話は途切れることがなかった。アミーラさんは、賢治が少年・少女向けに書いたと思われる作品、例えば「銀河鉄道の夜」などを題材に、賢治はどのような価値観を表現しようとしているかを研究テーマにしていると話した。エジプトで日本語教師であり、しかも宮澤賢治の研究者と出会うとは・・・私の想像の域を超えていた。アミーラさんとは、アスワン空港で別れた。

エピソード5：ビーズ・アート作家からの贈物

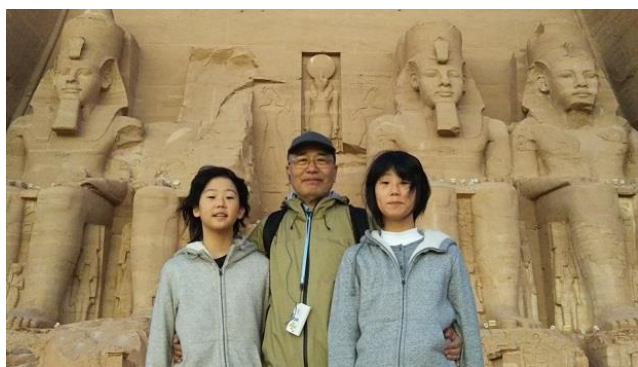
ツアーには、40歳半ばと思われる、姿勢がよくてきれいなご婦人とお母さまという組み合わせの親子が参加していた。お母さまは私と同じくらいの年齢。なにかと娘を頼りにしているのが、仕草で分かる。

3日目の昼過ぎ、アスワンからアブ・シンベルまでの砂漠の道280Km(3時間)をメルセデス・ベンツ製の高速バスはビュンビュン飛ばす。遙か前方を走る車に瞬時に追い

つき、抜き去る。道の左右には砂漠と岩山が広がり、道端の至る所にバーストしたタイヤが捨てられていた。多くのツアー客は、緑の木々がなく、単調で退屈な光景に飽き、居眠りを始めた。しかし私は、飽きずに車窓の外に見入った。

私の席の近くに座っていたそのご婦人は、バッグから何かを取り出し、編み物を始めた。しばらくして私が、「揺れるバスの中で編み物をすると、目が疲れませんか？」と話しかけると、「急いでいる仕事なので、旅先でも編み物をするんですよ」と笑顔で答えた。再び車窓に目を移すと、ずっと遠くに蜃気楼が見えた。

翌4日目の午後、アスワン・ハイダムの下流にあるイシス神殿を見学した。この神殿はナイル川の中洲にあり、東側の岸から小舟で渡る。この壮大なダムが建設されることによって、アブ・シンベル神殿（洞窟神殿）は人造湖であるナセル湖に水没する運命にあったが、ユネスコは世界中から基金を募り、数百メートル離れた岸に移築した。これによってアブ・シンベル神殿は生き延びたが、実は救われなかった神殿も多い。イシス神殿もそのひとつで、エジプト新王国時代には丘にあったが、いまはナイル川の中洲に取り残されている。



上:アブ・シンベル神殿。この超有名な石像の数十メートル先に、ナイル川をせき止めて造った広大なナセル湖が眼前に広がっていた。

右:中洲に取り残されたイシス神殿。



私たちが遺跡を見学していると、ご婦人のお母さまが急にグループを離れ、うずくまった。「どうしたの?」と思い、近寄ると、吐き気がすると言う。他のツアー客が心配して見守る中、私は大急ぎで背負っていたリュックからエチケット袋（通称、ゲボ袋）を取り出し、お母さまに差し出した。その瞬間、彼女はその袋に吐いた。私は、孫娘が幼いときから幾度も国内外の旅行に連れ出してきたが、乗り物酔いしやすいので、いつもエチケット袋を携帯している。それが役に立った。私の携帯しているエチケット袋は優れもので、中に凝固剤が入っている。吐しゃ物はすぐに固まり、ごみ箱に捨てることができるのだ。お母さまの吐き気が収まってから、私はウェスト・ポーチから除菌性ウェット・ティッシュを取り出し、彼女に渡して口元や手を拭いてもらった。

お母さまの様子が落ち着いてきたので、お母さまと娘さんのご婦人は、ひとまず皆と離れ、クルーズ船で休むことにした。残った私たちは、イシス神殿の見学を続けた。こ

の出来事は、「サブ添乗員」としての私の評価を、さらに高めた。

さて、その日の夕食時。私たち家族がクルーズ船のテーブルに座っていると、その親子が近付き、昼の出来事の御礼を述べてくれた。お母さまは、エジプトまでの14時間に及ぶ飛行機での拘束、そしてアブ・シンベルまで往復6時間のバス旅で疲れ、体調を崩したとのことだった。これを契機に、私たち家族とその親子の距離は一気に縮まり、その日の夕食は同じテーブルを囲んで食べた。

食事中の会話を通して、私はそのご婦人が有名なビーズ・アート作家のMさんであることを知った。アスワン行きのバスで編んでいたのは、ビーズだったのだ。以前は鎌倉に住み、学生時代には「ミス鎌倉」に選ばれたことがある。道理でスタイルがいいはずだ。大学卒業後、あるテレビ局のアナウンサーになったが、思うところがあり、ビーズ・アートに転向したという。

代表作に総ビーズで創作した「和衣装」(165万余粒)、「絵巻 徳川家康」(60万余粒)があり、特に「六曲屏風 鎌倉」には206万粒を使用したという。ビーズ数が桁違いに多いので、2009年にギネス世界記録に認定された。国内だけでなく、ワシントンDCやメリーランド州アナポリスでも個展を開催し、取り上げた新聞、テレビは数知れず。

また、Mさんが鎌倉時代の漂泊の歌人である西行が好きで、ゆかりの地である宮城県の鹽竈(しおがま)神社や松島の「西行戻り松」にも行ったことがあると話したことから、会話はさらに盛り上がった。私が通った中学校は鹽竈神社の裏手にあり、Mさんが登った202段の階段は通学路だった。そして、「西行戻り松」は私の実家のすぐ近くで、この丘から見える松島湾は絶景である。さらに、お母さまの好きな作家がカズオ・イシグロであることを知り、私の愛読書でもあることから、話は尽きなかった。

旅行最終日、カイロのホテルで私たち家族がエジプト最後の夕食をとっていると、近くのテーブルで食事をしていたMさんが私のところに来た。「今回の旅では母が大変お世話になったので、お礼をしたい。可愛い双子ちゃんに何かプレゼントしたいので、いいですか?」と尋ねた。その好意に甘えて「有難うございます」と答え、彼女の差し出したメモ帳に住所を書いた。さらに、双子の好きな色も聞かれたので、姉はブルー、妹はピンクと答えた。

日本に戻って1週間後、彼女から小包が届いた。封を切ると、双子のために徹夜して作り上げたのであろう、ブルーとピンクのビーズのブレスレットとイヤリングだった。孫娘は目をキラキラさせながら身に着けた。もちろん、お礼の返事を出しました。

日本に戻った後、ビーズ・アート作家のMさんから双子にプレゼントとして贈られたブレスレットとイヤリング。



エピソード6：ツアー客の護衛官は機関銃をもつ

6日目の朝、船内で朝食を取った後、ルクソール西岸にある「王家の谷」を見学するためにバスに乗り込んだ。すると一番前のシートに、上下黒のスーツを着た屈強そうな30歳くらいの男性が座っている。見知らぬ人だ。私は興味をもち、その男性の後のシートに席を取った。よく観察すると腰の右側が少し膨らんでいる。そしてバスの周囲や乗り込むツアー客を凝視している。一体、誰？ ガイドのアーデルさんに聞くと、ツアーの護衛官だという。でもなぜ？ さらに質問すると、1997年11月、「王家の谷」近くのハトシュプスト女王葬祭殿で発生したルクソール事件を話してくれた。

この事件は、テロリストが外国人観光客を待ち伏せして無差別に銃を乱射し、弾薬がなくなると短剣で襲ったという大惨事。日本人観光客10名を含む61名が殺害された。さらにその2か月前にもカイロ考古学博物館でテロがあり、観光客10名が犠牲になった。エジプト政府は、収入の糧である観光客が減少したため、テロリストを一掃しただけでなく、主要な遺跡に護衛官を配備した。そして、次第に平穏さが戻った。

アーデルさんからルクソール事件を聞いて、「そうだ、確かにそんな惨事があったなあ」と思い起こし、バスに乗った護衛官をあらためて観察した。何気ない拍子に上着がめくられると、肩から吊るした小型の機関銃が右側の腰ベルトに差し込んであるのがチラリと見える。

私は本物の銃を見たことはない。いや、一度だけある。3年前の2016年7月下旬、妻と双子を連れてパリに1週間滞在し、市内観光をしたときだった。前年の2015年11月13日にパリ同時多発テロが発生している。パリ市内では、小型小銃や機関銃をもった3~4人の兵士がグループとなり、メトロに不意に乗り込んで車内を巡回し、街角に立哨しては周囲を鋭い目つきで警戒していた。武器は隠すことなく、むしろあからさまに見せる。威嚇なのであろう。

話は少し脱線する。パリ同時多発テロを機に、イスラモフォビア(Islamophobia)、すなわちイスラームを嫌悪し、ムスリムに怯えて排除する風潮が、欧米、そして日本でも蔓延した。そして翌2016年5月28日、この風潮を憂いる有志による公開講座「イスラモフォビアと難民問題」(パレスチナ学生基金主催)が、東京国際大学早稲田キャンパスで開かれている。私は塩尻和子氏の紹介で聴講した。

司会を務めていたのは、シリアやイラクからヨーロッパ、特にドイツに逃れた難民を研究テーマとしていたパレスチナ学生基金代表の錦田愛子氏(慶應義塾大学法学部政治学科 准教授)。私は2015年7月から8月にかけて妻と双子を連れてドイツ鉄道旅をしたことがあった。そして、ベルリンからドレスデンへ行く列車の窓から、ウィーンを経由してベルリンに向かう大量の難民を目撃し、衝撃を受けた。2015年8月は、ヨーロッパに逃れる中東からの難民が世界中で報道された時期だ。こうした体験があったので、後年、錦田氏には、社会総合研究所のセミナーで講演をしていただくことにつながっていく(2019年5月18日)。

公開講座「イスラモフォビアと難民問題」の2か月後の2016年7月下旬、前述のようにパリに1週間滞在した。最終日、パリ北東部のラ・ヴィレット公園からセーヌ川まで続くサン・マルタン運河の川旅を楽しんだ後、バタクラン(Bataclan)劇場の跡地

を訪問した。パリ同時多発テロは、サン=ドニにあるサッカー場やパリ 10 区と 11 区のレストランなど、6 カ所でほぼ同時に発生したテロ事件であり、死者 130 名、負傷者 300 名以上の大悲劇となった。とりわけバタ克蘭劇場は、武装グループとパリ警視庁の特殊部隊の発砲に至り、死者 90 名という最大の犠牲者を数えた。

バタ克蘭劇場はサン・マルタン運河沿いにあり、フランス革命の勃発地バスティーユに近い。訪問時は、改修工事のために建物全体がシートで覆われ、激しい戦闘を思わせる焼け焦げた壁、散乱した椅子やガラス破片がそのまま残っていた。花束がひとつ、跡地の道端に置かれていたが、通行人は何事もなかったかのように通り過ぎる。私たち家族は、法華経の題目をあげ、犠牲者のご冥福をお祈りした。



バタ克蘭劇場のカフェ側の跡地。工事に備えて立ち入り禁止となっていた。妻との双子(当時、小学 5 年生)。

話を元に戻す。

パリの兵士からはピリピリした緊張感が伝わってきたが、エジプトの護衛官からは、どこかのどかな雰囲気が漂う。その日の午後、ルクソール神殿やカルナック神殿に行ったときも他の護衛官がバスに乗り込んできたが、同様にのんびりした感じ。お国柄なのか、ルクソール事件から 22 年間も平穏に何事も起きなかったからか・・・？

エピソード 7: カイロ空港にて 「何でこんなものを忘れるの？」

カイロ空港は、保安検査が厳しいとも言えるし、緩いとも言える。厳しいという点では、まず①空港に入るときに検査がある。次に②空港会社のカウンター検査 ③出国審査 ④搭乗ゲート前検査と計 4 回ある。しかし、それぞれの検査はおざなりの緩い。特に空港に入るときに検査①は、係官が入場する乗客の顔をぼんやり見ているだけで、脇見もする。

7 日目の最終日の夜、カイロ空港に入り、型通り①～③まで進んだ。④搭乗ゲート前検査は、イスラームの国だけあって、男女別々に行列を作る。男はベルトを外し、靴も脱ぎ、荷物はトレイに入れ、X 線検査を受ける。私は何事もなく X 線検査を通過し、トレイから荷物を取り戻し、身支度を終えた。ふと前方に目をやると、コンベアの先端に置かれたトレイの中にベルトが取り残されたままになっている。「バカな奴だな。ズボンのベルトがないことに気が付かないなんて。まあ、そのうち取りに来るだろう」と思いながら、近くの待合ロビーに向かった。飛行機が成田行きなので、ロビーはほとんど

日本人で埋まり、ちらほら他国の旅行客が混じっている。私の家族やツアー客は、互いに談笑していた。私はその輪の中に加わらず、搭乗時間までロビー内をうろうろして暇つぶしすることにした。壁に貼り出された掲示物を読んだり、旅行客の顔を観察して彼らの祖国を想像したり、ムスリムの礼拝用の小部屋をのぞいたりしていると・・・いつの間にか元の検査場に戻ってきた。ロビーを一回りしたわけだ。

先ほどのベルトは、まだトレイの中にある。「本当にバカな奴だ。なぜ気付かない?」。そのとき、乗客全員の検査を終えた若い検査係官が、英語で私に話しかけてきた。「(係官) あなたは英語と日本語を話すか?」「(私) ええ、まあ」。「(係官) ここに忘れ物のベルトがある。誰も取りに来ない。ロビーでこのベルトが誰のものか、聞いてくれないか?」「(私) えっ、私がですか?」「(係官) 頼むよ。俺は日本語分からないから」。私は仕方なくベルトをトレイから拾い、ロビーに行こうとすると、背中に「God Bless You!!」という声が聞こえた。

私は、普段よりも大きな声を張り上げ、ロビーに座っている 200 人ほどの乗客に向かって叫んだ。「どなたか、このベルトを検査場に忘れた人はいませんか～。Is there someone who forgot to take this belt back at the inspection area?」。孫娘は、「グランパがまたおかしなことをしている」と思っているのだろう、顔を真っ赤にして恥ずかしがっている。ツアー客は、「さすがサブ添乗員。やることが違う」という表情で私を見る。

ロビーをほぼ一周しかけたとき、日本人の若者が慌てて近寄り、「それ、俺のです」と言って私の手からベルトをひったくった。私は一瞬、カッとなった。「お礼ぐらい言えないのか!!」。その若者は、済みませんといって頭を下げた。

検査場に行って先ほどの若い係官に、ベルトは持ち主に無事届けたことを告げ、私は言った。「God Blessed Me!!」。係官は、私の顔を見てニコリとした。

ロビーに戻ると、ツアー客の元高校教師は「ああした臨機応変な対応は私にはできない」、台湾から参加した女性は「サブ添乗員はすごい」と言って褒めてくれた。

こうして、サブ添乗員としての楽しいエジプト旅は、無事に幕を閉じた。



エジプト最後の日。カイロのホテルのテラスからナイル川を望む。

ナイル川は実に広大だった。エジプト文明を築いた母なる大河であることが、実感として理解できた。まさしく、「エジプトはナイルからの贈り物」(Egypt is the gift of The Nile)だ。

私たちが旅行から戻った直後の年明けには、COVID-19 が中国から徐々に世界中に拡散し始めていた。1月中旬のある朝、新聞を読んでいたら、ナイル川クルーズ船運休の記事が目にとまった。年末にクルーズ船に乗った武漢からの団体客から、COVID-19 が他の乗客や船員に感染したことによる運休だという。これがひとつの感染源となり、やがてエジプトを巻き込んでいく。もし、私たちのエジプト行きが2週間後だったとしたら……。運よく難を逃れたことになる。

後日談「なんとという奇遇」

2020年2月下旬、私は発刊されたばかりの書籍「日本のイスラームとクルアーン 現状と展望」（晃洋書房）を塩尻和子氏から贈呈された。この本の中で、塩尻氏は「イスラームフォビアに立ち向かう」というテーマで一章を書かれている。そして、この風潮の過ちを、イスラームの歴史、ルクアーンの解釈、ムスリムの考えをもとに説いている。

私はこの本を読んだ感想を書き、塩尻氏にお送りした。「サブ添乗員のエジプト旅」と一緒に。すると数日後、次のようなメール（斜体字）をいただいた。なお、「サブ添乗員のエジプト旅」に関係する部分のみ残し、他は割愛してある。

先日は「サブ添乗員のエジプト旅」をととても楽しく、懐かしい気持ちで拝読いたしました。

ナイル・クルーズも私がいたところから比べると、とてもよく企画されているようです。いい時期にいらっしやっただので、穏やかにゆったりとしたご旅行ができたことと思います。世界観が変わりましたか？ それほどでもなかったかもしれませんが、エジプトは「歴史は変転するもの」ということを、目に見える形で教えてくれるところです。世界の主役は、時間・時代とともに入れ替わるものだと教えてくれるような気がしたことを思い出します。

エジプト航空のトイレ故障はいつものことですが、こんなところも呑気なエジプト人の気質を象徴していますね。

ここ2、3年、海外へ出かけることが面倒になって、できるだけ家でこもって暮らしている私には、桜井様の旅行記の一行一行に懐かしい思い出がいっぱいあって、繰り返し読んでおります。ダハシュールのピラミッドなどは、近くに軍事基地があるので、20年ほど前までは一般には公開していなくて、1991年頃、私は軍隊から許可をもらって見学会を催し、大使館や日本人会の人たちを案内したことがありました。

それにアスワン行きの飛行機の中で出会われた女性は、なんと私の教え子のアミーラ・サイド(Amira Said)さんです。彼女が筑波大学で博士号を取る際、すでに私は東京国際大学へ移っていたのですが、私的な立場ながら彼女の論文指導を全面的に引きうけて、丁寧に指導し、落ち込みがちになる彼女を励ましてきました。

その後、彼女がカイロに戻ってからも、何度かカイロや東京で会いました。今もよく

連絡を取り合っています。彼女の論文の一部を東京国際大学の国際交流研究所の紀要に掲載したこともありますので、添付ファイルでお送りします。彼女は宮澤賢治の「少年小説」の分野を専門的に研究していて、日本人にも難しい80年以上前の文章を読みこなし、その精神をエジプトの人達にも理解してもらおうと、今でも努力しています。

アミーラさんはエジプト人には珍しく、細身でおしゃれな人ですが、イスラーム教徒です。エジプト人は古来、混血が進んでいるので、家族の中でもいろいろな肌の色、髪の色、顔かたち…が混じっています。彼女はエジプト政府の公務員として働きながら、カイロ大学とアスワン大学で日本語と日本文学を教えています。2012年の写真ですが、彼女が学位を取って帰国したすぐ後に、私もカイロへ行って会いました。そのときの写真をお送りします。

桜井様と私が友達だと知ったら、もっと喜ぶと思います。日本語でメールのやり取りもできますので、ご連絡してみてください。



塩尻氏(左)からのメールに添付されていたアミーラさん(右)とのスナップ写真。2012年、カイロにて。

「エピソード 4:若いエジプト女性は宮澤賢治の研究者だった」で書いたアスワンに向かう飛行機の中で出会った女性は、塩尻氏のお弟子さんだったとは……。なんという奇遇。早速、アミーラさんにメールを出しました。そして、「宮澤賢治の山旅」も含めて、アミーラさんがたぶん持っていないと思われる賢治に関する書作を、数冊送った。

アミーラさんは、アラブ調査室の2月号に「エジプトから見た日本のユートピア」と題する論文も投稿されている。